

児童、短歌を詠む（学校図書館にて）

三浦 恒子

平成17年4月より平成20年3月まで豊後大野市内の全校生徒14人の小さな小学校の図書館司書として、3年間勤務しました。50歳を迎えた私の遅い出発でしたが、短大時代に取得した図書館司書の資格を生かした（永年の念願でした）初めての経験は私の人生の中でも、最も楽しく喜びに満ちた出発となりました。

同じ年に着任した校長先生に、児童に短歌を作ってもらって良いか尋ねたところ、快諾して下さい、図書館教育の一環として「短歌を詠む」読書集会を設定しました。

第1回目の「短歌の話」は平成17年4月22日の授業参観日とPTAの日に1、2、6年生が3時間目、4、5年生が4時間目に図書館での自習の時間を活用して、児童に「短歌」とは何かを20分間説明し、後半の20分間で作歌してもらいました。

児童には「森羅万象」（私たちが生きているこの地球を始め、宇宙の全て、身の回り全ての事）は短歌に詠んでも良いこと。ただし、人の悪口だけは詠まないことの話をしました。そして短歌が字数の決まった「詩」であることなどを説明しました。

29歳で出会った短歌に人生を救われた一面もある私にとって、短歌は自己表現の手段です。児童に短歌を強要するつもりはありませんでしたが、自己表現の一つとしての短歌に出会うことにより、人生が幅の広いものになればという願いから始めました。大人なら、「さあこの20分間で短歌を詠もう」と言っても、かなりの無理があると思われそうですが、個々人の程度の差こそあれ、児童はそれをやってのけます。

作歌の意欲を湧かせる事と、他人の眼に触れる事によって出来の良し悪しの判断の目安になれば良いと思い、NHK全国短歌大会ジュニアの部、宮崎県の若山牧水全国こども短歌コンクールに3年間応募しました。

※NHK全国短歌大会ジュニアの部（各年度入選作品集より転載）

平成17年度入選者

てつぼうで地きゅうまわりをしていたら目がまわりかけたそんままつづけた 当時小2 竜一

平成18年度入選者

かぶとむしはっぱのなかでねてるんだかぶとむしうごかないんだよ 当時小1 耕大

かつおぶし死んでいるのに生きているりょう理にのせたらふわふわ動く 当時小3 采佳

夜の木はみんなで会議するのかな一度会議を聞いてみたいな 当時小5 観月

※若山牧水全国こども短歌コンクール（各年度入選作品集より転載）

第5回平成17年度

お湯の中ほうれん草があばれてるお湯から出ると年寄りみたい 当時小4 里桜

かたつむりによきによきによきと動いてる私は静かに歩いてみるよ 当時小4 由紀

第6回平成18年度

木は立っているよじっと立っているかわいそうだね木がね 当時小2 実涼

第7回平成19年度

こんにちわはふしぎな力をもっているなぜかしらないぼくもいうんだ
あらくりすおるめれなせしえわせいよやつとみまむそ何語だよー

当時小2 耕大
当時小6 直樹

3年間で通算17人の児童の中で8人の児童が入選を果たしています。(1人は2回ですので、あわせて9人です。)

賞を取るために行っている訳ではありませんが、昔のように表彰状を全校児童もしくはクラスの児童の前で渡すと言う事はありませんでした。教諭の先生方の反対にありました。1人、2人、だけが表彰される事は良くないそうです。全員が表彰される事でないといけないそうです。はっきり言って、驚きました。現在の教育はそういう事だったのです。私はあく迄も、囑託職員の身分ですから、教諭の先生の言に従いました。しかし、大きな疑問が残ります。折角、NHKや宮崎県から頂いた賞を全校児童に披露してはいけないのでしょうか？私共の学生時代は賞を取ろうと思って活動していなくても、たまたま頂いた賞をみんなの前で褒めてくれました。褒められた児童がもっと頑張ろう、貰わなかった児童は次に頑張ろう、と意欲を湧かせるのではないのでしょうか？個性豊かな人格を目指す学校教育が今は歪められていると思う一端でした。

豊後大野市内ではただ1校だけ「徳田白楊」という昭和初期の歌人を継承して短歌を取り入れている小学校がありますが、そちらの校長先生が平成19年2月26日、私に会いたいと見えられ、「どうしてこちらの学校はNHKや若山牧水に多く(児童数に対する割合)の子供たちが入選するのでしょうか、その秘訣を教えてください」と訪ねて見えました。短歌とは何か、という小冊子を作り、児童に与えていること、駄作でも良いから作り続けること。たくさん作歌すること。標語にならないこと、あく迄も詩であること。教諭の先生方の目から良いと思っても果たして良いものかどうか検証すること。先生方の色眼鏡で見ると、お行儀の良い歌、おりこうな歌、標語のような歌となる可能性が多いこと。一年生は手取り足取り一緒について作らせること。児童の短歌に殆ど添削は施さないこと等こちらのノウハウを全て公開しました。

小冊子も頂きたいと言われ、快く差し上げました。

果たして、次の年は何人もの児童がNHKで入選を果たしていました。



初年度平成17年度と平成19年度には私の短歌の師匠である、熊本の石田比呂志先生が来校し、児童と交わりを持ちました。

先生の話聞いた次の短歌集会はそれは見事なものです。14人の児童がみんな、何十首も作ります。新しく1年生が入学したら、高学年が作り方を教えたりしました。気候の良いときは戸外で作ったりもしました。

自由にのびのび作歌することによって、児童はどんな短歌も作ります。授業中の事や、授業中以外にどのようなことに興味を持ち、どのような思いをしているかを垣間見る事が出来ます。

図書館という、教室ではない空間で、教室では言えない事や見せない顔を見せてくれるのも図書館です。

この活動を通じて、今日、今すぐに何がどうなる、と言うものではありません。今すぐに本を読む冊数が増えるかと言うと性急に結果を求める事は出来ません。中学、高校になって開眼する児童もいるでしょうし、大人になってから、短歌を思い出したり本が好きになったりする児童もいるでしょう。児童の将来を見据えての長い眼を持つべきと思います。



※ 熊本の石田比呂志先生来校の折に児童が作った短歌

(短歌結社『牙』より転載)

いたいようつめたい水がささったよすいどうで手をあらうときひびいてきたよ

	当時小 1	実涼
木の下にまい子の小鳥おちてたよそとくるんで木の上におく	当時小 2	采佳
月の夜はきれいできれいでかわいいよまるまるかわいいお月さま	当時小 2	竜一
ありさんの行れつできてながかったどこまであるか見せてくれたよ	当時小 2	いつか
生活でホットケーキを作ったよかんたんでおいしかったよ	当時小 2	宏樹
先生のオナラのおい気ぜつするでも私のオナラも気ぜつしますよ	当時小 4	里桜
図書集会短歌の発表きんちょうした発表できると気持ちがいいけど	当時小 4	観月
木は話す私はなんかそう思うみんなは思うかわからないけれど	当時小 4	由紀
お兄ちゃんいつもけんかして遊んだりけんかをしたら仲直りする	当時小 4	比呂美
赤ちゃんが木馬に乗ってゆらゆらとぐらぐらごとごとすってんころりん	当時小 4	日向子
ぼくの愛犬ぼくとおさななじみだけれどぼくより知ってること多いかもよ	当時小 4	直樹
どんなかな未来の私見てみたい何しているか仕事している？	当時小 5	里美
学校へ行く途中にバケツの中氷発見もう冬だね	当時小 6	由香里
太陽が目の中にあるみたいだな心ぞうにひびく夜空の花火	当時小 6	向明

※石田比呂志先生に児童が感想を送ったもの(『牙』より転載)

当時小 4 二宮里桜

歌人の石田比呂志先生から、短歌の話聞いた。その中で、一番私が心に残ったのは、「虫も大切に生きて殺さない。」ということ。それは、家にゴキブリや、クモがいっぱいいるから、家の人みんな、虫を見たら殺してしまう。でも、私はたたくふりをして、にがしたりする。なぜかわからないけど殺せない。じいちゃんは、「虫を見てにがしたりするやつがどこにおるか。」と、おこる。でも、石田比呂志先生も、「ゴキブリの声が聞こえて、殺せなかった。」と言っていた。だから、「殺さないのは私だけじゃない。」と思って、うれしかった。

それから、私の短歌であのオナラの短歌がほめられるとは、思わなかった。いつ書いたかわすれたけど、あのオナラの短歌を書いた時、春藤先生がオナラをひって、これだと思って書い

た。そしたら、おもしろおかしくほめてもらえた。自分の中じゃ、少しショックだったけど、ほめてもらえて、また短歌を好きになった。

家にも短歌ノートがあるから、三浦先生にも見てもらおうと思う。

虫を大切に。これからおもしろい短歌を作っていこうと思う。

当時小4 大塚由紀

歌人の石田比呂志先生から、短歌の話を聞いた。私が一番心に残ったのは、「犬とか動物は、自分がもうだめだ！と、思ったら、おなかを見せてこうさんする。でも、きつねは、こうさんの時は、自分のうでをかむんですよ。」と、石田先生が自分の体を動かしながらやってくれたので、いかに、動物たちが、どうやって生活をしているのかがよくわかった。

それから、ルーキーは、おなかを見せるけど、お母さんも、私も、みんなは、今まで、ルーキーはがおなかを見せたら、あたっている人には、なれてるとか言っていた。それを、お母さんに言いたくて、心の中にしまっていたのである。

それから、しつもんをする時は、私は、「短歌は、いつから書きはじめたんですか。」と、言ったら、三浦先生から、「いつも言ってるでしょ！書くじゃなくて。」と、次の言葉を言おうとすると、石田先生は、それをとめて、自分がどうやってきた事や、いつから、短歌を歌いはじめたかを話してくれた。私は、そんな事があったのかあーと思っていたが、あんなこと、しつもんをしてよかったのかなあと思った。でも、石田先生は、ほめてくれたっていうか、いいしつもんをしてくれたと、言ってくれた。

そして、里桜ちゃんは、おならの短歌の事をしつもんしていたが、げひんだなと思った。

当時小4 足立比呂美

歌人の石田比呂志先生から、短歌の話を聞いた。その中で、一番心に残っているのは、石田先生は、16才の時からずっと、短歌を歌っていて、テレビを見ている時も、すぐに頭の中に短歌を思いついて、その思い出した短歌を忘れないために、短歌のノートに自分で考えた、短歌を書き写していたことだ。ダンボール箱に入れないといけないくらい短歌を作っているんだなあと思った。なぜかというと、テレビを見ているだけなのに、頭の中で短歌を思いうかべるなんて、やっぱり私にとってはすごい。もし、私だったら、頭の中で何も考えないで、楽しく見ているから、私とは、反対だ。

それから、質問コーナーの時に、私が石田先生に質問をした、「一日に何こぐらい、短歌を作っていますか。」と聞いたら、石田先生が、「一日に、三万こぐらいの短歌を作ってます。(一日に最低一首、今までに三万首ぐらい)」私は、「すごくねえ(すごいじゃないの)」と思った。そしたら、後から石田先生から、「大人みたいな、質問をするねえ。」と言われたので、とてもうれしかった。

後、私が作った短歌、「お兄ちゃんとけんかをしても仲直り」という短歌で石田先生から言われた言葉が、「お兄ちゃんとけんかしてもすぐに仲直りしたんだったら、いい。仲直りするくらいのけんかだったらいい。」と言われた。私は、お兄ちゃんと仲直りしない時もあるけど、仲直りするけんかの方が多い。

私が作った短歌で、ほめられたのでうれしかった。私は、この短歌を書いてよかったと思った。

当時小5 田嶋里美

火曜日、学校に来てくれて、ありがとうございました。

私は石田先生が昔、不良だったと聞いて、びっくりしました。でも不良の時に、石川啄木の『一握の砂』を見て、不良がみうら先生の先生になって、「すごいな。」と思いました。私も『一握の砂』を見たいと思います。

私は最初短歌が、あまり好きではありませんでした。でも石田先生が来て、みんなの短歌をほめていたら、なんだか短歌が好きになりました。毎日は無理だけど、思いついたら書きます。また来てくださいね。

私のつくった歌を、いっしょに入れます。見てください。

かたつむり目を当たったらへこむんでもへこんでもまたでてるよ
体の中いろんな物食べてあそこから黄色い物茶色い物出るよ

当時小6 安藤由香里

今日、三浦先生の、短歌の先生の石田先生が来てくれました。最初は、みんなの短歌をほめてくれました。その話の中に、石田先生の子どものころのことを話してくれました。その話は、とてもおもしろくて、みんな笑いすぎるくらい笑っていました。私の短歌の番になりました。私は、この短歌は、じしんが、ない短歌だったから、えらばれて、うれしいような、なんか不思議な感じでした。でも、私の短歌を、わかってくれるんだなあと、思いました。

今日、私は、石田先生の話聞いて、なっとくする話ばかりだったと思います。「あり」を見る時、自分が、近づいて観察すればいい。私は、そのとおりだと思いました。つかまえたら、かわいそうと思います。石田先生は、「全部の短歌が、好き」と言っていました。私もそうなりたいたいと思いました。

当時小6 高木向明

今日は、石田先生から、短歌のいい所を教えてくださいました。

先生がこんなおどろくお話をして下さいました。ゴキブリに土下座していたという話です。ぼくは、その話をきいて、「えー。」と言いました。だって、ゴキブリに土下座するんですもの。でも、理由を聞いて、納得しました。ゴキブリの方が人間より昔からこの世にいるからです。みんなの歌のいいところを見つけてくれて、ついにぼくの番です。ぼくのは、音が心にひびくのは、あたりまえだけど、太陽みたいというのが心にひびくのは、すごくいいと言ってくれました。とてもうれしかったです。

今日は、とてもいい一日になりました。ドキドキで順番待って、やっときた。

とてもうれしいことばをもらおう。

※石田比呂志先生より 小学校のみなさんへ

地球上の山川草木、鳥獣虫魚ら生きとし生ける物は、みな人間と平等の命を持ち、痛さや、悲しみ、喜びや、驚きや涙を持っています。そのことを忘れずに生きましよう。

3年間を通じて

- ・ 1年目は教諭の先生方との連携がとれて、授業に短歌を取り入れて下さる先生がいた。それに伴い、司書を授業等に活用して下さる先生がいた。
- ・ 児童にもっと短歌とは何かの話をしたかった。もっと活動したかった。
- ・ 2年目に読書集会から短歌集会に独立してもらえた。

- ・ 児童の読書量に差ができた。本を読む児童と読まない児童に分かれる傾向にあった。
- ・ それに伴い短歌を好きな児童と短歌を嫌いという児童がはっきりしてきた。
- ・ 3年目は先生方の司書の活用が減った。(私の至らなさの故)
- ・ 出来るだけ外で遊ぶ事を奨励する先生が多く、読書推進の力を貸してもらえなかった。
- ・ 3年間図書館活動の半分くらいを短歌にかまけていて、(必ず読書に繋がるという思いから) 図書館便りも短歌を採用したりしていましたが、上司から短歌と図書館活動とは関係ないと言う言葉を頂き、活動が窮屈なものとなりました。これも、私の上司や教諭の先生とのコミュニケーションがうまく取れていなかったことや、自身では気付いていない活動の誤りがあったかと思われまます。

学校司書として勤務して (あく迄も私の3年間の経験上に限る)

- ・ 学校司書を配置していることは高く評価されるべきことであるが、市役所嘱託職員として、1年毎の契約更新による、身分の不安定さのため、司書部会などで集まっても、来年は個人の上がどうなっているか分からないという不安定さが持ち上がり、長期的な展望のある話し合いが持てない。司書のレベルアップに対する意識に個人差を感じた。
- ・ 県内の学校司書の中でも身分的にはまだ良いほうで、PTA会費半分、公費半分の雇用などでもっと身分がはっきりしていない市町村もあると聞く。豊後大野市では、3年を経過し、4年目になると、1ヶ月の無給の休暇を取らせるなど、身分を更に不安定にする雇用をしている上、その1ヶ月も仕事をする事は公には認められていない。
- ・ 各図書館での活動を各学校司書はそれぞれに工夫してやっていることを、教職員を初め、教育委員会などが全く把握できていないにも拘わらず(2年目に、活動内容のレポートを出しましたが、レポート上には表せない、個々の雑多な事もあります。)活動していないと言う批判さえ耳にした。司書の仕事が把握されていない。

最後に

全国的にも、学校司書を配置している豊後大野市はすばらしいと思います。しかし前述のように思うように司書が活動出来ない事、いつ首切りされてもおかしくない状態にしている事などを考えると、まだまだ問題点はあります。

豊後大野市だけで考えると、限界があります。全国的にももっと司書を配置する事を推進し、雇用の安定を図り、司書を活用している先進県に学び、学校教育の一端を担う事が必要です。

大分県でも、津久見市は司書の活動が盛んで、各学校の司書の方が連携して活動しています。そういうところに学ぶ機会をもっと増やして、司書同士がレベルアップする機会が持てたら良いと思っていましたが、3年間で私の司書生活は潰えてしまいました。

この報告書を携えて、現役の司書の友人に会いに行きました。今年は豊後大野市で大分県図書館研究大会が開かれるそうです。それに伴い、豊後大野市は司書を配置していることをもっと外部に知って貰おうと、各学校の司書さんがどんな活動をしているかアピールする予定だそうです。

(みうら・つねこ 元学校司書)